

減災の正四面体モデルにおける社会的なリアリティ  
 ～「知」と「信」の乖離を超克するために～  
 Basic Consideration of Co-constructing the Social Reality  
 in Tetrahedron Model of Disaster Reduction

○近藤誠司・矢守克也

○Seiji KONDO, Katsuya YAMORI

After 3.11, it has been pointed out that a crucial disconnect between “knowing” and “believing” cause a barrier to appropriate tsunami evacuation behavior. For the purpose of analysis on the typical case, we conducted interviews with people in Hirogawa-town, which was struck by North Wakayama Earthquake on July 5<sup>th</sup> in 2011. In consequence, we found people had constructed various and fluctuating reality over tsunami risk and the gap between “knowing” and “believing” was extremely dependent upon the situation. On the basis of past achievements, we consider how we can construct sound reality of risks with the tetrahedron model of disaster reduction.

### 1. 「知」と「信」の乖離をめぐる問題

津波避難を例に考えてみるに、たとえ行動を指示する情報や知識—すなわち「知」—があったとしても、それが即刻リアリティをもってわがことに受け止められる—すなわち「信」—とは限らない点、3.11をめぐる多くの事例が示すところである。“警報あれど避難せず”という状況は、まさに「知」と「信」の乖離現象を象徴している。

ところで、「知」の補強は、防災教育や情報伝達の拡充等によって、3.11後も精力的におこなわれている。しかしそこには、原理的な限界がある。ひとつは、科学に代表される知の体系が「真理の候補（仮説）の集合」でしかない点、そしてもうひとつは、渦中にあるのは、情報は事後的にしか確定されえないという点である。一方で、「信」の補強は、多くの場合、「知」の補強で代替されようとしてきた。しかし、「知」をベースにした「信」の補強のドライブが、かえって「行政依存」や「専門家任せ」などの逆作用を生む危険があることは、3.11以前から、すでに明らかとなっている。したがって、あらためて「知」と「信」をめぐる問題状況を整理した上で、従来とは異なるアプローチから、この閉塞を超克する道筋を探る必要がある。

### 2. 方法と対象

情報は、生生流転するリアリティが物象化したモノにすぎない。事態の解明には、情報の有無や正誤を事後に検証するだけでは十分とはいえ、人々がどのように感じ、どのように行動したのか、総合的なリアリティのダイナミズムをできるかぎり当事者の地平から捕捉する必要がある。そこで

本研究では、2011年7月5日和歌山県北部地震（M5.4）を対象として、最大震度5強を記録した和歌山県広川町の住民に対して、詳細な聞き取り調査を実施することにした（継続中）。

### 3. これまでの成果

本震災の重要な特徴として、①3.11から4か月に満たない警戒期に起きたこと、②地震発生直後、町では音声避難誘導システムが稼働し、警報音が響き渡っていたこと、③しかしテレビではいち早く「津波の心配はありません」というテロップを表示していた点があげられる。相矛盾する情報入手した住民の多くは、多様で流動的なリアリティを抱いていたことがあきらかになってきている。

**住民A** 自宅で地震発生、TVで津波の心配がない旨、確認したが、向かいの家族が避難するのを目撃し、近くの神社に避難することを決意。息子を誘うも断られる。携帯電話を握りしめて出発、避難誘導システムの作動自体は印象弱し。神社入口に到着後、何ら情報更新せず、さらに境内にも入らずに自己判断で帰宅（＝浸水到達予想時刻）。

**住民B** 自宅で地震発生、経験したことがない揺れに驚く、TVで津波の心配なしのテロップを見るも、避難所に向かうことに。途中、避難誘導システムの音で危機感を抱く。避難場所で他の住民と合流、安堵、何ら情報更新せず待機、防災無線の「心配なし」の呼びかけを受けて帰宅。同記事態が起きたら、もう避難しないと総括している。

なお発表に際しては、上述した調査の結果をふまえて、「正四面体モデル」（岡田・宇井，1997）を援用して、様々なアクターが「溶け合う」インタラクションの意義に関して考察する。